

研究論文

短期海外ボランティアによる主観的成長と「社会人基礎力」 (ワークキャンプ型とホームステイ型の違いに着目して)

小菅 洋史^A

The Study of Subjective Educational Effects through Short-Term International Volunteer Programs and “Fundamental Competencies for Working People” (Focusing on the Difference between Work-camp and Home-stay)

Hiroshi KOSUGA^A

Abstract: In this paper, I analyze the results of short-term international study programs, particularly volunteer programs, held in 35 countries around the world by comparing the results of work-camp (WC) programs and home-stay (HS) programs with reference to the "Fundamental Competencies for Working People" as specified by Ministry of Economy, Trade and Industry (METI). By confirming survey results collected from participants after participating in these programs, I identified a rise in subjective effects such as independence and stress control as well as four factors necessary for growth: assertion, risk management, solution planning and ethnocentrism. In particular, I explored the commonalities between the growth gained from participating in WC programs and the skills desired by society.

Keywords: Short-term International Volunteer Program, Work-camp, Assertion, Fundamental/Essential Competencies
キーワード：短期海外ボランティア、ワークキャンプ、アサーション、社会人基礎力

1 問題と目的

1.1 背景：学生に求められる成長と海外研修

急速に拡大する市場のグローバル化に対応するため、留学経験や英語力が求められているが、2009年当時、日本人学生の英語力は、企業のニーズに対しては世界57か国中55位（10ポイント満点中3.21ポイント）、海外留学経験値は41位（0.47ポイント）と低迷していた¹⁾。このような事態に直面しているにも関わらず、未来を背負って立つ日本人学生の海外留学者数は、2004年の82,945名をピークに、2011年の57,501名まで減少していた。

こういう現実を抱えていた日本²⁾では、「内向き志向克服のため、さまざまな海外留学生への支援制度が整えられてきた。具体的には、1983年の「留学生10万

人計画」から、2008年の「留学生30万人計画」へ、「受け入れ」から「送り出し」へ転換がなされたことを皮切りに、日本学生支援機構による「海外留学制度（協定派遣/大学院学位取得型/学部学位取得型）」、「官民協働海外留学支援制度～民協働海外留学支援制度トビタテ！留学JAPAN 日本代表プログラム～」や、文部科学省による「大学の世界展開力強化事業」（2011）、「グローバル人材育成推進事業」（2012）、「スーパーグローバル大学創成支援事業」（2014）、「卓越大学院プロジェクト」（2018）などが講じられてきた。その結果、「海外研修プログラム」³⁾の参加者数は、2017年度66,058名となり、2009年度23,988名と比較すると急激な増加が成し遂げられた³⁾。

10代後半から20代初めという時期は、一般的な知識や技能だけでなく、社会の一員として生きるための心構えや自分の将来の目的を見定めるといった、広い

A: (一社) CIEE 国際教育交換協議会 国際教育推進部

意味での人格形成が求められる重要な時期である。故に、これまで培ってきた常識とは異なる価値観に触れることができる学生時代の海外渡航経験には、多様な成長が期待され、様々な視点からの研究が進められている。

海外研修の効果として第一に期待される英語力の向上については、短期間であっても、プログラム参加前後におけるテスト得点の上昇だけでなく、リスニングスキルの有意な向上や、自発的な意欲、統合的な語学学習への動機付けの効果が報告されている⁴⁵⁾。ただし、参加者の熟達度の差異までは言及されていないため、より精緻化された検証は必要である。

また、実際に言葉を使う局面であるコミュニケーションにおいては、外国語使用不安の低下や英語を話したいという意思、といった情意的な側面での効果が報告されている⁴⁶⁾。

さらに、カルチャーショック⁴⁷⁾や異文化に対する感情面でのポジティブな変化⁴⁸⁾など、異文化理解に至るまでの心理・認知的変容についても多種多様な効果が報告されている。ただし、その効果の測定は、知識やスキルといった顕在的な一面だけでは測りきれないことも指摘されており、個人の価値観や信念といった内面的なバックグラウンドまで反映させるBEVI(Beliefs, Events, Values Inventory)などの様々な測定尺度についての研究も進められている⁴⁹⁾。

つまり、学生の海外渡航経験には、語学レベルによる熟達度の差異や測定方法の検証の継続が求められているものの、内向き志向の克服だけでなく、語学学習への意欲や、異文化と向き合う心構えなどにポジティブな効果があることがわかっている。

1.2 社会のニーズと短期海外研修

「社会人基礎力」¹⁰⁾は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の3つの能力(12の能力要素)から構成され、2006年に経済産業省より提示されたものである。日本社会の内外を取り巻く激しい変化に対応するため、学校教育だけでなく、家庭や地域、学校、そして社会における共通指標として注目されている。なぜなら、少子高齢化に伴う労働人口の減少から、海外より流入する人材と協働することの必要性が現実的に高まっている日

本社会において、言語等、様々な文化や背景をもった人々と協働できるスキルが求められているからである。

つまり、留学をはじめとした海外経験は、意図的に組み込まれたではないにしろ、“予期できない様々な問題や困難に対し、主体的に(主体性)、解決に向かって(働きかけ力)、問題を解決すること(実行力)”が求められるため、「社会人基礎力」に通ずるスキルとの親和性が非常に高いものである¹¹⁾。

このように、若手人材育成において、多種多様な成長とスキルを体得させる効果が認められ、参加者数も増加し、推奨傾向の一層高まる海外研修ではあるが、経験者の「参加期間」に着目すると、2016年度の参加者における31,432名、実に約60%が1か月未満に留まっており、少なくとも3ヶ月以上が必要である、と主張する、86%以上の社会・企業からのニーズ¹²⁾とは、ミスマッチが生じていることが指摘されている¹³⁾。

一般的に「短期(海外)研修」と呼ばれるものは、2週間から3か月間程度、外国にて現地の言語や文化についての学習、特定の技能や知識の向上を目的とした体験型教育活動を指すことが多い。しかし、その内容は語学研修、ボランティア、インターンシップなど、様々な種類が見受けられ、公式な定義づけはされていない。また、その教育効果を高めるための方法も十分に検討されているとは言えない状態である。そのため、総務省から、政策上の位置づけを明確にし、次期計画へ反映するようことの勧告が文部科学省宛になされたのも事実である。

1.3 短期海外ボランティア

大学生を対象にした海外研修プログラムを運営する第三者機関・団体は数多く存在する。アメリカに本部をもつ非営利教育団体である、一般社団法人CIEE国際教育交換協議会(以下、CIEE Japan)が運営する「CIEE海外ボランティア」(以下、海外ボランティア)は、1995年より運営されており、延べ18,000名以上、最近では年間1,000名以上の日本からの参加者を輩出している。

渡航先はヨーロッパ、北中米、アジア、オセアニアなど世界約35か国にわたり開催されており、およそ週単位、一ヶ月未満の期間で参加できる個人参加型の短期プログラムである。特徴は、参加者は日本国内空港に集合し、随行員の管理の下、定められた同一行程

の他の日本人参加者と行動を共にする一般的な海外語学研修とは異なり、自ら旅程を組み立て、航空券や現地交通手段を手配し、自身の力のみで航空機に搭乗し、現地では不自由ながらも現地言語（特に英語、少なくとも活動中の共通言語は全て英語と設定されている）を駆使しながら、移動をこなさねばならない現地集合解散制度である。旅程は自由であるため、事前事後に旅行等のスケジュールを組み込むことも可能である。

なお、英語力を参加資格としてはいない。そのため、英語力不足で参加を断念せざるを得ない留学とも異なり、また、集団で参加する一般的な海外研修プログラムより自発的な態度と覚悟、失敗も含めた多くの経験から得る学びの効果が期待される。そのため、数多くの大学において公認プログラムとして利用されている。その参加者の約99%は大学生である¹⁴⁾。

「海外ボランティア」を扱った先行研究は、数は少ないものの、日本人学生が同一行程でまとまる集団参加型プログラムである「語学研修」参加者と、個人参加型プログラムである「海外ボランティア」参加者とを、事前事後アンケートより比較した結果、次のことがあげられている。

「海外ボランティア」参加者の方が「自信感」の高まりが有意に高いこと¹⁵⁾、エスノセントリズム(自民族・自己文化中心主義)傾向の低下、国際的関心の高まり、異文化への開放的態度の強まりに加えて、英語使用に関わる不安やコミュニケーションに関連する効果があること、ホームステイ参加経験者を含むワークキャンプ参加者の、自己概念の変化、多文化性の理解、コンフリクトと異なった集団のありようへの気づき、弁証法的な学びの可能性、といった多様な学びをもたらすこと¹⁶⁾が報告されている。

このように、これまでの先行研究において「海外ボランティア」自体のもつ効果は確認されているが、いずれも内容や性質の異なる、ワークキャンプ、ホームステイの差異にまでは言及されていない。またその効果が、社会より期待されている成長と整合するかを検証したものもない。

そこで本研究では、「海外ボランティア」を次の観点から分析した。1:形態の差異より、ワークキャンプ型

とホームステイ型に分割すること、2:「海外ボランティア」参加で得られる成果と社会から期待される成長として、海外研修の効果と親和性が高いとされている「社会人基礎力」との整合性をとることである。これらに基づき、参加者本人がどのような成長感を得たのかを明確にするため、参加前後の変化ではなく、事後の主観的な成長感に着目し、調査・分析を行った。なお、本研究では、集団参加プログラムである短期語学研修については扱わない。

1.4 ワークキャンプ型(WC)とホームステイ型(HS)

「海外ボランティア」には、行き先や内容等によって様々なタイプがあるが、表1のとおり、「環境保護活動」のようにプログラム間で共通する項目がある一方、参加費用のように量的な違いが明確な項目もある。

これらを考慮した上で、本研究では、最も特徴的かつ差異を生じさせる要因として挙げられる、滞在方法・滞在中のメンバー・活動中の食事・宿泊の4項目から成る「滞在形態」と、集合場所・空港送迎の2項目から成る「集合形態」の2点に注目し、ワークキャンプ型(1種)とホームステイ型(2種合算)の2分類の比較より分析を行った。なお以下、ワークキャンプ型はWC、ホームステイ型はHSと表記する。

「滞在形態」に着目すると、WCは、世界中から集まったボランティアメンバーとの合宿形式であり、ボランティア活動はもちろん、寝食や自由時間も行動を共にする。食事は、食材を提供された上での自炊であるため、メニューの考案から調理、配膳から後片付けまで、英語を用いて対等かつ積極的にコミュニケーションを行い、万が一不平が生じた際には抗議を行い、是正することも含め、協力体制を構築する必要がある。一方HSは、ボランティア活動中は他のメンバーとの共同作業が求められるが、滞在中はホームステイ先のルールに従いながら、「学生」の立場に安住できる。

「集合形態」に着目すると、WCでは例えば、フランスの田舎のバス停や、カンボジアの農村など、活動地へ直接赴く必要があり、現地国へ到着してからの道のりは、慣れぬ現地の交通ルールの中で、時には道に迷い、人に尋ねながら必死にたどり着く必要がある。

表1 ワークキャンプ型(WC)と、ホームステイ型(HS)の比較 (2017年夏現在)

		WC	HS
対象プログラム		国際ボランティアプロジェクト	カナダ「地域サポート」「環境保護」 「アニマルケア」 オーストラリア/ニュージーランド 「チャイルドケア」
参加条件		18歳以上。高校生不可。語学レベル不問。	
参加費用		1プロジェクト ¥43,000	2週間 ¥189,000~220,000
参加期間		既定の1~4週間程度	2週間より選択可能
開催国		ヨーロッパ(フランス、トルコ、 フィンランド、ロシアなど) アジア(ベトナム、韓国など) 北米(アメリカ、メキシコなど)	・カナダ(トロント・バンクーバー・ ビクトリアなど4都市から選択) ・オーストラリア(シドニー) ・ニュージーランド(オークランド)
活動内容		・遺跡/建築物(建築、修復) ・自然(農作業、環境保護) ・文化(芸術、文化、お祭り) ・社会福祉(子供、難民支援) ・教育/学び(教育、言語)	・カナダ:施設の活動など ・オーストラリア/ニュージーランド: 幼稚園や保育園のアシスタント。
集 合 形 態	集合場所	駅、バス停など、活動地 最寄りの指定場所	活動地に最寄りの大都市空港にて ホストファミリーによる出迎え
	空港送迎	なし	あり
滞 在 形 態	滞在方法	公民館などの公共施設、テント、 ゲストハウスなどでの合宿	ホームステイ先にてホームステイ 原則個室
	滞在中の メンバー	世界中からのボランティアと、 キャンプリーダー	活動先でのメンバー及び ホストファミリー
	活動中の 食事	受入先より支給される食材を 使って自炊	1日2~3食付 *昼食は各自用意か、派遣先にて。
	宿泊	滞在先によるが、寝袋持参	ホームステイ先にて部屋が与えられる

一方HSは現地国(カナダ・オーストラリア・ニュージーランド)大都市の空港にさえ到着すれば、ホストファミリーの出迎えがある。このことから、WC・HS間で得られる経験に差異があることは予想される。

なお、ある体験者による一日の流れは、「7:00の朝食後、午前中に3時間ほど作業、昼食と昼寝の後、午後2時頃から3時間ほど作業、夕方は順番に入浴と夕飯準備、夕食後、自由時間」ということであり、概ね他の参加者の報告もWC・HS共に同様であった。

2 調査

2.1 調査

2.1.1 調査対象者

調査対象者は、2017年夏期参加者456名であった。内訳は、WCは国際ボランティアプロジェクトの340名であり、HSはカナダ「地域サポート」「環境保護」「アニマルケア」参加の70名と、オーストラリア/ニュージーランド「チャイルドケア」参加の46名の計116名であった。

2.1.2 調査手続き

質問紙に関しては、大学の国際交流の専門家2名と教育心理学の専門家1名による合議にて、以下2つの視点より24の質問項目を策定した。1つ目の視点から次のとおり、13の質問項目を策定した。それは「社会人基礎力」の12項目（主体性・働きかけ力・実行力・課題発見力・計画力・創造力・発信力・傾聴力・柔軟性・状況把握力・規律性・ストレスコントロール力）や、グローバル人材育成に求められる要素³⁾（要素Ⅰ：語学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱ：主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ：異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティ）を軸に、これまでの参加者より見聞きしている海外経験及び短期海外ボランティア参加にて得られている成果を照合して作成された（表2括弧内太字）。また、2つ目の視点として、「海外ボランティア」特有の効果を見出すことも意図とし、独自の11項目（4：海外渡航への自信、9：新規知識の獲得、10：知識の活用、12：自発的な英語学習、14：情報リテラシー意識の向上、19：人生への目標設定、20：異文化理解への気づき、21：エスノセントリズムへの気づき、22：アイデンティティへの気づき、23：海外への嫌悪感、24：動機づけ）を加えた。これらを5件法（参加前と比較して、どの程度成長したか。1：そう思わない～5：そう思う）で回答を求めた。

調査後には公立小中高等学校及び専門学校教員、塾講師等の専門家8名を加えた様々な見識の下で検証を行い、今後の改善に活かすこととした。

その他の質問項目は、メールアドレス、氏名、所属、プログラム参加時の年齢、性別、参加プログラム名、渡航国、活動内容、プログラム開始日、プログラム終了日、これまでの海外経験の有無、海外体験がある場合のその内容、参加検討を開始した時期、参加動機（複数回答可）、成長の役に立った活動（複数回答可）などで構成した。

調査紙は、Google INC.の提供するGoogle formsを利用し作成の上、対象者へ配信した。なお、調査の倫理的配慮として、回答は任意とし、得られたデータを今回の調査以外の目的で用いることはないこと、個人が特定できる情報の公開は一切されないこと、体験の評価を行うものではないことを予め、明示した。

予備調査を2017年9月23日～9月30日にかけて、

2014～2015夏期ボランティア参加者5名（学生4名及び社会人1名）の協力の下で実施した。その後、改善点の収集・改良を行い、項目を決定し、本調査を2017年10月16日～11月30日に実施した。

2.2 結果と考察

2.2.1 収集結果

165名より24の質問項目に対する回答を得た結果は、WC 129件で78.1%、HS 36件で21.8%であった。得られたデータを統計ソフトR等で統計処理を行い、結果を分析した。

2.2.2 海外体験で得られる成長と社会人基礎力

参加前と比較して得られた成長について、表2のとおり24項目中、19と低い数値が望ましい項目である21以外の22項目において、WC・HSに共通して3.0を超え、成長を感じている傾向がわかった。

「社会人基礎力」に対応する項目に着目すると、「計画力」（項目1及び2）、「実行力」（同3及び11）、「傾聴力」（同5）、「発信力」（同6）、「ストレスコントロール力」（同7及び17）、「主体性」（同8）、「課題発見力」（同13）、「規律性」（同15）、「状況把握力」（同16）、「柔軟性」（同18）において、WC・HS共に3.5以上の平均値を得ており、共通した主観的な成長が認められた。

WC・HS間における平均値の差を比較すると、WC>HSは19項目、HS>WCは2項目、WC=HSは3項目であった。WC>HSを+、WC≤HSを-とした符号検定を行ったところ、前者(+)¹⁹、後者(-)⁵、 $n=24$ 、有意水準5%での $\alpha=6$ であり、WCとHSの平均値を参考にした差異には違いが認められ、WC参加者の方が自己の成長を高く捉えている傾向がわかった。

両平均値をt検定にて分析した結果、5：自分とは考えの異なる意見を聞くことの大切さを感じるようになったこと（傾聴力）、12：英語学習について、これまでとは異なり、自発的な方法で取り組もうと思うことができたこと（自発的な英語学習）、18：マナーなどの文化的な差異に起因する生じるトラブルを越え、メンバーと仲良くなったこと（柔軟性）の3項目において、 $p<.01$ で特に有意に、2：危険や不安要素を推測し、事前に対応策を講じることができるようになったこと（計画力）の1項目において、 $p<.05$ でやや有意に、

表2 プログラム参加で得た成長評価の WC・HS 間の平均値比較 (1~5 の 5 件法)

	参加前と比較して、どのような点で成長したか。 ※太字は社会人基礎力相当項目、グレーの項目はかつ WC・HS 間で有意差あり	平均値 (標準偏差)		t 値 (自由度) p 値
		WC	HS	
WC >	1: 段取り、準備をうまく進めることができるようになったこと (計画力)	3.6(0.84)	3.5(0.77)	t(163)=0.62, p=.53, ns
	2: 危険や不安要素を推測し、事前に対応策を講じることができるようになったこと (計画力)	3.8(0.89)	3.6(0.84)	t(163)=2.13, p=.03, *
	4: また海外へ行ってみようと思えるようになったこと (海外渡航への自信)	4.8(0.78)	4.4(0.84)	t(163)=1.34, p=.18, ns
	5: 自分とは考えの異なる意見を聞くことの大切さを感じるようになったこと (傾聴力)	4.4(0.80)	4.0(1.04)	t(163)=2.61, p=.009 **
	6: 相手に伝わるように、自分の意見を主張できるようになったこと (発信力)	4.0(0.78)	3.9(0.99)	t(163)=0.84, p=.40, ns
	7: ストレスのかかる生活上の課題に、冷静に対応できるようになったこと (ストレスコントロール力)	4.1(0.84)	3.8(0.87)	(163)=2.00, p=.05 †
	8: メンバーの一員として自覚を持ち、積極的に活動に協力して取り組むことができたこと (主体性)	4.1(0.88)	3.9(0.71)	t(163)=0.68, p=.49, ns
	9: 今まで知らなかった知識、経験を得ることができたこと (新規知識の獲得)	4.6(0.70)	4.4(0.84)	t(163)=1.33, p=.18, ns
	10: 今回得た知識、経験を活かして、やりたいことができたこと (知識の活用)	4.0(0.96)	3.8(1.04)	t(163)=0.84, p=.40, ns
	12: 英語学習について、これまでとは異なり、自発的な方法で取り組もうと思うことができたこと (自発的な英語学習)	4.2(0.87)	3.8(0.87)	t(163)=2.69, p=.007 **
HS	13: 困った時に解決方法を見出し、問題を解決できる自信がついたこと (課題発見力)	4.0(0.87)	3.8(0.74)	t(163)=1.15, p=.25, ns
	14: 海外の本当の姿は web の情報だけではわからないことがわかったこと (情報リテラシー意識の向上)	4.4(0.89)	4.2(1.00)	t(163)=1.28, p=.20, ns
	15: チームで協力するためにルールが重要であるとわかったこと (規律性)	4.0(0.95)	3.6(1.05)	t(163)=1.80, p=.07 †
	16: 異なる文化の人と意見の違いや相手の立場を理解しつつ、接することができたこと (状況把握力)	4.4(0.77)	4.3(0.77)	t(163)=1.26, p=.20, ns
	17: コミュニケーション上のトラブルに際し、我慢しすぎないで対応できたこと (ストレスコントロール力)	3.8(0.94)	3.6(0.96)	t(163)=0.94, p=.35, ns
	18: マナーなどの文化的な差異に起因する生じるトラブルを越え、メンバーと仲良くなったこと (柔軟性)	4.3(0.79)	3.8(0.93)	t(163)=3.23, p=.001 **
	21: 他国と比べて日本が一番だと思ったこと (エスノセントリズムへの気づき)	3.5(1.24)	3.8(1.27)	t(163)=-0.97, p=.33, ns
	22: 自分自身について考えるようになったこと (アイデンティティへの気づき)	4.0(0.89)	3.8(0.82)	t(163)=1.76, p=.25, ns
	24: 次のチャレンジへステップアップしようとの意欲が高まったこと (動機付け)	4.4(0.80)	4.2(0.76)	t(163)=1.00, p=.31, ns
	HS > WC	20: 日本にいて当たり前だと思っていたことが、海外では違うことがあるとわかったこと (異文化理解への気づき)	4.3(0.90)	4.4(0.83)
23: もう2度と海外には行きたくない、と思うほど、酷い目にあつたこと (海外への嫌悪感)		1.3(0.71)	1.1(0.32)	t(163)=1.76, p=.08 †
WC = HS	3: 様々な不安や困難を乗り越えて、目的を達することができるようになったこと (実行力)	4.2(0.78)	4.2(0.89)	t(163)=-0.04, p=.99, ns
	11: 準備不足を悔しく感じるがあったが、改善をして、さらに取り組もうと思うことができたこと (実行力)	4.0(0.97)	4.0(0.77)	t(163)=-0.3, p=.77, ns
	19: 将来の夢が固まったこと (人生の目標設定)	2.9(1.14)	2.9(1.18)	t(163)=-0.2, p=.88, ns

※ ** p<.01, * p<.05, † .05<p<.10. 対応の無い t 検定。両側検定。

※ 斜字で記した、低値が望ましい 21、23 の 2 項目は、分析に影響はないことを確認済みのため、逆転処理を行わず示す。

WC における主観的な成長が高い傾向が認められた。7: ストレスのかかる生活上の課題に、冷静に対応できるようになったこと (ストレスコントロール力)、15: チームで協力するためにルールが重要であるとわかったこと (規律性) の2項目においては、統計的に有意な差はないが、 $.05 < p < .10$ で、WC における主観的な成長を示す値が高い傾向が認められた。

一方、23: もう2度と海外には行きたくない、と思うほど、酷い目にあったこと (海外への嫌悪感) の1項目については HS の方が有意な傾向が確認された。

なお、3: 様々な不安や困難を乗り越えて、目的を達することができるようになったこと、11: 準備不足を悔しく感じるものがあつたが、改善をして、さらに取

り組もうと思うことができたことに共通する (実行力) は、WC・HS で同値で 4.0 以上の高い評価を得ており、両プログラムに共通する成果と考えられる。

19: 将来の夢が固まったこと (人生の目標設定) の評価値が低いことは、本プログラム自体が、多くの場合、留学の前段階に位置づけられており、まだ海外経験の第一歩の役割であることの影響が考えられる。ただし、21: 他国と比べて日本が一番だと思ったこと (エスノセントリズムへの気づき) は、設問自体が本来の意図とは異なり、他国を下位に比して日本がよい場合と、対等に比してなお日本のよさを認める場合など、複数の解釈の可能性があるので、精査を今後の課題とする。

表3 抽出された成長項目と因子負荷量

因子	成長項目	因子負荷量				共通性
		1	2	3	4	
F1 (アサーション/ Assertion)	6: 相手に伝わるように自分の意見を主張できるようになったこと (発信力)	.77	-.12	-.09	-.01	.42
	15: チームで協力するためにルールが重要であるとわかったこと (規律性)	.63	.16	.00	.15	.56
	17: コミュニケーション上のトラブルに際し、我慢しすぎないで対応できたこと (ストレスコントロール力)	.49	-.06	.09	.08	.27
F2 (リスクマネジメント/ Risk management)	1: 段取り、準備をうまく進めることができるようになったこと (計画力)	.20	.45	-.13	-.01	.30
	2: 危険や不安要素を推測し、事前に対応策を講じることができるようになったこと (計画力)	-.23	.87	.06	.01	.42
F3 (ソリューション プランニング/ Solution planning)	7: ストレスのかかる生活上の課題に、冷静に対応できるようになったこと (ストレスコントロール力)	.23	.07	.35	-.23	.39
	10: 今回得た知識、経験を活かし、やりたいことができたこと (知識の活用)	.15	.17	.49	-.12	.52
	11: 準備不足を悔しく感じるものがあつたが、改善をして、さらに取り組もうと思うことができたこと (実行力)	-.10	-.11	.76	.24	.51
F4 (エスノセントリズム/ Ethnocentrism)	21: 他国と比べて、日本が一番だと思ったこと (エスノセントリズムへの気づき)	.12	.09	.08	.62	.41

表4 4因子における合成得点の平均値の分析

	WC	HS	t 値、(自由度)、p 値
F1	3.92 (0.89)	3.71 (0.99)	t(493)=2.09, p=.03, *
F2	3.76 (0.88)	3.54 (0.79)	t(327)=1.94, p=.05, †
F3	4.00 (0.92)	3.86 (0.89)	t(493)=1.41, p=.15, ns
F4	3.51 (1.24)	3.75 (1.27)	t(163)=0.97, p=.32, ns

0内は標準偏差。 ** p<.01、* p<.05、†.05<p<.10

信頼性を示すクロンバックの α 係数(WC/HS)は、F1(0.60/0.72),F2(0.52/0.63),F3(0.60/0.70),F4(ns/ns)

2.2.3 海外体験で得られる成長の因子構造

2.2.2 で得られた海外ボランティア参加の成果と、社会人基礎力に通じる成長因子を探るため、因子分析を行った。因子の数は固有値 0.90 以上、累積比率 50.0% 以上を基準に4つとした。因子の策定には、反復主因子法、プロマックス回転を用い、因子負荷量の絶対値 0.30 以上を抽出、表3のとおり分類した。この際、平均値の中間点である 3.0 を下回り、成長評価が認められていない 19 と、平均値±標準偏差が 1.0 未満及び 5.1 以上であった 4,5,9,12,14,16,18,20,23,24、そして因子負荷量が 0.40 以下であった 3,8,13,22 は不良項目として除外した。

各因子に属する項目に共通する意味を推理、確認し、表3のとおり、因子に命名を行った。

第1因子は、相手の立場を認めながら、自分の意見をまとめる姿勢から、アサーション(Assertion)と命名した。第2因子は、危険や不安要素を推測し準備できる力から、リスクマネジメント(Risk management)と命名した。第3因子は、課題を次に活かす力から、ソリューションプランニング(Solution planning)と命名した。第4因子は、2.2.2 で指摘された通り、複数の解釈が可能である問題点もありかつ単一項目ということで除外も検討したが、広い視野をもつという海外経験に期待される重要な要素であるため、抽出された事実を重く捉え、エスノセントリズム(Ethnocentrism)と命名した。

これらのうち、F1における3項目中の3項目 6,15,17、F2における2項目中の2項目 1,2、F3における3項目中の2項目 7,11 の7項目は社会人基礎力につながる項目であるため、F1、F2、F3は特に「社会人基礎力」にも通じる因子であると考えられる。

2.2.4 4因子に対するWC・HSにおける成長

WC・HSにおけるF1~F4各項目の合成得点より、WCとHS間の平均値を算出し、差をt検定(対応の無いt検定。両側検定)によって比較した。

表4の通り、F1:アサーションにおいてHS参加者に対するWC参加者の自己評価の平均値の高さが、p=.03で有意差をもって確認できた。F2:リスクマネジメントにおいては、p=.05で、WC参加者の方が、統計的な有意差はないが、値が高い傾向が認められた。一方、F3:ソリューションプランニング、F4:エスノセントリズムについての有意差は認められなかった。

上記結果より、F1:アサーション、F2:リスクマネジメント、という社会人基礎力に通じる、海外ボランティア参加で得られる主要な成果において、HSに対する、WC参加者の主観的な評価の高さを確認することができた。

3. 全体的考察

3.1 平均値の分析からの考察

WC・HS参加における主観的な成長評価とグローバル人材として社会で求められる要素、とりわけ「社会人基礎力」とつながる成長については、平均値について言及する限りでは、2.2.2で示した通り、関連する13項目全てにおいて、WC・HS共に3.5以上の平均値を得たことから、WC・HSに共通して、参加者が主観的な効果を得ていることが示された。

その中でも、5:自分とは考えの異なる意見を聞くことの大切さを感じるようになったこと(傾聴力)と18:マナーなどの文化的な差異に起因する生じるトラブルを越え、メンバーと仲良くなれたこと(柔軟性)の2項目については、HSと比較してWC参加における成

果が特に有意に大きかった。また、2:危険や不安要素を推測し、事前に対応策を講じることができるようになったこと(計画力)についても有意差が認められた。7:ストレスのかかる生活上の課題に、冷静に対応できるようになったこと(ストレスコントロール力)、15:チームで協力するためにルールが重要であるとわかったこと(規律性)の2項目については、統計的な有意差はないものの、WCにおける成果の値が高い傾向が確認された。

これらは、様々な困難を乗り越える必要があるWCならではの「現地集合解散」によって磨かれ、また、「規律性」、「柔軟性」は様々な背景をもつ世界中からのボランティアメンバーとの英語を介した主体的な共同生活という、WCならではの特異な「滞在形態」の効果と考えられる。このように一部の質問項目でHSの間に自己評価において差が生じたことは、先行研究からも明らかになっているように、WCにおける自信の高まりの影響が考えられる。

ただし、HSに効果がないということではなく、あくまでも参加者の主観的な評価の上では有意差が生じた結果である。HS参加者における評価、成果の質については検証の継続が必要である。

3.2 因子分析からの考察

本研究の結果、「海外ボランティア」の参加によって得られる効果として、「アサーション」、「リスクマネジメント」、「ソリューションプランニング」、「エスノセントリズム」という、4つの因子を確認することができた。この4因子は、2.2.3で先述の通り、「社会人基礎力」に通じる項目が含まれており、つながりがあるものと考えられる。

この中で、F1:アサーションで特にWCにおける有意な効果が検出できたことは、1.4で述べたように、滞在先のルールに従いながら、「学生」の立場に安住できるHSと比べ、世界中から集まるメンバーとの一定の規律の中での共同生活において、英語を用いて対等かつ積極的にコミュニケーションを行い、かつ万が一不平が生じた際には抗議を行い、是正を含めた協力体制を、自身の実力や慣れ、ストレスを管理しながら構築していかなければならないという、WC特有の「滞在形態」の効果であると考えられる。

また、F2:リスクマネジメントで有意な傾向が確認

できたことについては、これも1.4に挙げたとおり、現地空港から先にある集合場所まで自力でたどり着かねばならないWCと、大空港まで到達すればホストファミリーによる出迎えがあるHSとの「集合形態」の違いの効果を、特に支持する結果であると考えられる。

一方でF3、F4の因子については、効果がないのではなく、参加者の事後自己評価においては、WC・HS間に大きな差はなかった、と言える。

3.3 今後の課題

本調査によって、参加者の事後自己評価ではあるものの、様々な参加の成果が確認された「海外ボランティア」は、短期のプログラムである。つまり、「長期」でなければ効果はない、という主張は、「社会人基礎力」として掲げるスキルを求める上では、少なくとも成り立たない。しかし、同じ短期といえども、2週間か4週間といった期間の違いにも、今後着目する必要があると考える。

日本国内外で様々なバックグラウンドを持つ人材と協働することが求められるであろう、これからの時代において、特に「アサーション」というスキルによってもたらされる、アサーティブなコミュニケーションは、相互理解の中から、新たな選択肢やアイデア、合意を作り出すこと¹⁷⁾であり、宗教、人種、国家といった様々な価値観や概念を認め、グローバル社会におけるバランスを生み出す基礎であると考えられる。

「海外ボランティア」には、これらのスキルを体得するチャンスがある。ただし、正確には、1:WC・HSというプログラム自体がもつ性質と効果の違い、2:参加者の参加前の海外経験の有無や内容、3:相対的な参加動機の内発性の強さが参加プログラムの選択に影響していること、そして、4:活動内容や現地への渡航過程、事前事後の個人旅行といった、渡航スケジュールのあらゆるシーンにおける学びの機会があることなど、様々な要因が最終的な成果へ影響を与えているため、どのタイミングで、どのような情報(内容だけでなく、媒体も)に触れるか、が効果の質を高めるための重要なポイントである¹⁸⁾。

また、今回特に着目した「社会人基礎力」であるが、策定当時(2006年)の課題は、「国内市場の相対的規模の縮小と、東アジアを中心とする海外の急成長」といった、「日本企業の世界市場(特にアジア内)での相

対的な存在感低下」であり、そこに求められたのが、海外でのビジネスモデルに対応するための語学力や国際経験を持った「グローバルに活躍できる人材の育成」であった。しかし、瞬く間に移行行く時代の変化の中で、「グローバル人材」、「海外志向」、「英語力」といった言葉より、今や「スキルをアップデートできること」、そのために必要な力として「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、「どう活躍するか」という新たな3つの視点を加えた「人生100年時代の社会人基礎力(Essential Competencies for the 100-years life)」が発展形として提唱されている¹⁹⁾。

この変化は、まず海外に行くこと、を推し進めていた時代から、参加者自身が海外渡航の目的を明確にすると同時に、参加プログラムの内容を十分に精査、照合し、教育的効果を高めるため工夫をしなければならぬという視座と一致している。

なお、研究手法として、質問紙による主観的な事後調査というものは、実際よりも高く評価してしまう認知バイアスの可能性等も考慮すると、方法論としての限界も無視できない。参加者の主観的な評価だけでなく、多角的な評価も加えること、そして、先に挙げた「エスノセントリズム」の精緻化についても、今後、調査分析を深めていきたい。

注

- [1] 本論文は、修士論文として執筆した研究を元に、加筆修正を加えたものである。
- [2] ここでいう、海外プログラムとは、日本学生支援機構(JASSO)による「協定等」プログラムであり、大学長、学部長等の捺印又はサインを交わした正式文書だけではなく、正式文書としては両大学間で取り交わしていなくても派遣に関わる事務文書が大学等に存在し、交流実績がある取決め又は覚書等を指しているため、大小ではなく、様々な規模のプログラムを含む。
- [3] 文部科学省グローバル人材育成戦略(グローバル人材育成推進会議 審議まとめ)(2012)参照。<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf> (2019年3月4日参照)

引用・参考文献

- 1) 経済産業省.(2010). 産学人材パートナーシップ グローバル人材育成委員会 報告書～産学官でグローバル人材の育成を～. http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1364125/www.meti.go.jp/policy/economy/jinzai/san_gaku_ps/2010globalhoukokusho.pdf
- (2019年9月10日参照)
- 2) 文部科学省.(2019). 「外国人留学生在籍状況調査」及び「日本人の海外留学人数」等について—「日本人の海外留学状況」. http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/_icsFiles/afiedfile/2019/01/18/1412692_1.pdf (2019年9月13日参照)
- 3) 日本学生支援機構.(2019). 平成29年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果. https://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2018/_icsFiles/afiedfile/2019/01/16/datah30n_1.pdf (2019年9月13日参照)
- 4) 小林敏彦.(1999). 海外語学研修の英語力はどれくらい伸びるものか. 小樽商科大学人文研究, 97, 83-100.
- 5) 木村啓子.(2006). 英語圏滞在が学生の英語力に及ぼす影響—短期語学研修により英語力は向上するか—. 尚美学園大学層F号政策研究紀要第12号
- 6) 八島智子.(2009). 海外研修による英語情意要因の変化: 国際ボランティア活動の場合. JACET Journal, 49, 57-69.
- 7) John Berry.(2005). Acculturation: Living successfully in two cultures. *International Journal of Intercultural Relations*, 29, 697-712
- 8) Shizu Koyanagi.(2018). Impact of Intercultural Communication During Short-term Study-abroad of Japanese students: Analysis from a Perspective of Cognitive Modification. *JOURNAL OF INTERCULTURAL COMMUNICATION RESEARCH*, 47, 2, 105-120.
- 9) Michigan State University.(2014). ASSESSING EDUCATION ABROAD OUTCOMES: a review of the BEVI, IDI, and GPI. https://educationabroad.isp.msu.edu/files/2914/9486/1612/Assessing_EA_Outcomes_WhitePaper.pdf (2019年3月13日参照)
- 10) 経済産業省.(2006). 社会人基礎力, <http://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8231957/www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/about.htm> (2019年9月24日参照)
- 11) 小林文生.(2013). 短期海外研修による教育的効果の再検討: 学生の報告書の多面的な分析を通して. 人文・自然研究, 一橋大学, 7, 162-185.
- 12) 総務省.(2017). グローバル人材育成の推進に関する政策評価〈評価結果に基づく勧告〉, http://www.soumu.go.jp/main_content/000522826.pdf (2019年3月4日参照)
- 13) 工藤和宏.(2009). 日本の大学生に対する短期海外語学研修の教育的効果—グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく一考察—. *Speech Communication Education*, 22, 117-139.
- 14) 国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部.(2018). CIEE 海外ボランティア報告書 2017年4月～2018年3月
- 15) 仲野友子.(2014). CIEE アンケート調査結果報告 I—短期海外体験には自信感や国際志向性を向上させる効果があるのか—, <https://www.cieej.or.jp/ciee/press/14/document/20140331/report1.pdf> (2017年7月2日参照)

- 16) 八島智子. (2016). 国際協働プロジェクト参加を通じた「学びの質」. 関西大学外国学部紀要, 15, 33-50.
- 17) 平木典子. (2015). アサーションの心 自分も相手も大切にコミュニケーション. 朝日新聞出版
- 18) 小菅洋史. (2018). 大学生の海外ボランティア参加動機と活動の有効性-ワークキャンプ型とホームステイ型の違いに着目して-. グローバル人材育成教育学会 第6回全国大会予稿集, 104-105.
- 19) 経済産業省. (2018). 我が国産業における人材力強化に向けた研究会「人生100年時代の社会人基礎力」と「リカレント教育」について.
http://www.meti.go.jp/ommittee/kenkyukai/cmiraikokyositu/pdf/002_s01_00.pdf
 (2019年1月24日参照)

受付日 2019年11月26日、受理日 2020年6月19日